大学入試
実戦国語
現代文・小説

見本

現代文

小説

基礎問題

1

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（桜美林大・文）

拝啓。暑中の御見舞いを兼ね、いささか老生日頃のa愚衷など何申述候。老生すこし思うところ有之。b近来ふたたび茶道の稽古にふけり居り候。ふたたび、とは、唐突にしていかにも虚飾の言の如く思召し、れいの御賢明の苦笑など漏らし給わんと察せられ候も、1何をか隠し申すべき、われ幼少の頃より茶道を好み、実父孫左衛門殿より手ほどきを受け、この道を伝授せらるる事数年に及び申候えども、2悲しい哉、わが性鈍にしてその真趣を究むる能わず、3しかのみならず、わが一挙手一投足はなはだ粗野にして見苦しく、われも実父も共に呆れ、孫左衛門殿逝去の後は、われその道を好むと雖も、指南を請うべき方便を知らず、なおまた身辺に世俗の雑用ようやく繁く、心ならずも次第にこの道より遠去かり、父祖伝来の茶道具をも、ぽつりぽつりと売り払い、いまは全く茶道と絶縁の浅ましき境涯と相成り申候ところ、近来すこしく深き所感も有之候まま、まことに数十年振りにて、ひそかに茶道の独習を試み、いささかこの道の妙訣を感得仕り申候ものの如き実情に御座候。

それ*覆載の間、朝野の別を問わず、人皆、各自の天職に心力を労すればまたその労を慰むるの娯楽なかるべからざるは、いかにも本然の理と被存候。而して人間の娯楽にはすこしく風流の趣向、または高尚の工夫なくんば、浅ましき風情と相成り果て申すべく、すなわち各人その好む所に従い、或いは詩歌管絃、或いは囲碁挿花、謡曲舞踏などさまざまの趣向をこらすは、これ万物の霊長たる所以と愚案じ申す次第に御座候。4然りと雖も、相互に於ける身分の貴賤、貧富の隔壁を超越仕り、真に朋友としての交誼を親密ならしめ、しかも起居の礼を失わず談話の節を紊さず、質素を旨とし驕奢を排し、飲食もまた度に適して主客共に清雅の和楽を尽くすものは、実に茶道に如くはなかるべしと被存候。

利久居士、豊太閤に仕えて初めて*草略の茶を開き、この時よりして茶道大いに本朝に行われ、名門豪戸競うて之を玩味し給うとは雖も、その趣旨たるや、みだりに重宝珍器を羅列して豪奢を誇るのc顰に倣わず、閑雅の草庵に席を設けて、淳朴を

解答・解説⇩別冊39ページ

旨とし清潔を貴び能く礼譲の道を修め、主客応酬の式頗る簡易にしてしかもなお雅致を存し、おのおの其の分に応じて楽しみを尽くすを以て極意となすが如きものなれば、この＊聖戦下に於いても最適の趣味ならんかと思量致し、近来いささかこの道に就きて修練仕り申候ところ、卒然としてその奥儀を察知するにいたり、この喜びをわれ一人の胸底に秘するも益なく5惜しき事に御座候えば、明後日午後二時を期して老生日頃昵懇の若き朋友二、三人を招待仕り、ささやかなる茶会を開催致したく、貴殿も万障繰合せ御出席然るべく無理にもおすすめ申上候。6流水濁らず、奔端腐らず、御心境日々に新たなる事こそ、貴殿の如き芸術家志望の者には望ましく被存候。茶会御出席に依り御心魂の新粧をも期し得べく、決してむだの事には無之、まずは欣然御応諾当然と心得申す者に御座候。頓首。

ことしの夏、私は、このようなお手紙を、れいの黄村先生から、いただいたのである。黄村先生とは、どんな人物であるか、それに就いてはいまは繰り返して言わないけれども、私たち後輩に対して常に卓抜の教訓を垂れ給い、ときたま失敗する事があるとはいうものの、とにかく悲痛な理想主義者のひとりであると言っても敢えて過称ではなかろうと思われる。その黄村先生から、私はお茶の招待を受けたのである。招待、とは言っても、ほとんど命令に近いくらい強硬な誘引である。否も応もなく、私は出席せざるを得なくなったのである。

けれども、野暮な私には、お茶の席などそんな風流の場所に出た経験は生まれてから未だ一度も無い。黄村先生は、そのような不粋な私をお茶に招待して、私のぶざまな一挙手一投足をここぞとばかり嘲笑し、かつは叱咤し、かつは教訓する所存なのかも知れない。油断がならぬ。私は先生のお手紙を拝誦して、すぐさま外出し、近所の或る優雅な友人の宅を訪れた。

「君のところに、何かお茶の事を書いた本が無いかね。」私は時々この上品な友人から、その蔵書を貸してもらっているのである。

「こんどはお茶の本か。多分あるだろうと思うけど、君はいろんなものを読むんだね。お茶とは、また。」友人はいぶかしげの顔をした。

「茶道読本」とか「茶の湯客の心得」とか、そんな本を四冊も借りて私は家へ帰り、片端から読破した。

＊覆載＝天地。　草略の茶＝簡素で略式の喫茶。　聖戦下＝太平洋戦争中。

（太宰治「不審庵」）

問一　傍線部1～6の語句は、この手紙文の中では、どのような修辞的用法によって用いられているか。それぞれの語句の用法を、次のイ～ヘのうちから選べ。

1 何をか隠し申すべき
2 悲しい哉
3 しかのみならず
4 然りと雖も
5 惜しき事に御座候えば
6 流水濁らず

イ 順接
ロ 添加
ハ 比喩
ニ 反語
ホ 逆接
ヘ 感動

問二 この手紙文では、「拝啓」が頭語、「頓首」が結語として対応している。頭語として「前略」を用いた場合、これに対応する結語として、最も適当なものを、次のイ～ホのうちから選べ。

イ 机下　ロ 草々　ハ 拝復　ニ 冠省　ホ 敬具

問三 傍線部a「愚衷」の意味として、最も適当なものを、次のイ～ホのうちから選べ。

イ 自分の本心。　ロ もうろくした思案。　ハ 愚痴。
ニ 苦しい胸中。　ホ 自分なりの議論。

問四 傍線部b「近来ふたたび茶道の稽古にふけり」という状態に、黄村先生がなった理由として、最も適当なものを、次のイ～ホのうちから選べ。

イ 幼少の頃より茶道を好んだが、実父逝去の後、茶道と絶縁の境涯になったことを悔い、実父に報恩しようと志したため。
ロ 人間には娯楽が必要だが、それは風流かつ高尚なものでなければならず、中でも茶道が最高であるとの結論に達したため。
ハ 利休の茶道は閑雅純朴を旨とし、簡易な法式で主客が楽しむものであるから、この聖戦下にあって最高の趣味と考えたため。
ニ 無趣味な若い後輩たちを茶会に招いて、その無趣味さを思い知らせ、先輩として高尚な趣味人ぶりを誇示しようとしたため。
ホ 戦時下の世相が無趣味に堕していることを嘆き、風流を再興して生活に新風を吹き入れ、芸術興隆を図ろうとしたため。

問五 傍線部c「顰に倣わず」の意味として、最も適当なものを、次のイ～ホのうちから選べ。

イ　見えを張らない。　ロ　何度も繰り返さない。　ハ　嘆きを共にしない。
ニ　不粋なことをしない。　ホ　人まねをしない。

問六　黄村先生の手紙の文体と内容から、この人物がどのような人柄であると想像されるか。その人柄として最も適当なものを、次のイ～ホのうちから選べ。

イ　極めて古風で謙抑な人柄で、手紙を書くにも幼少から仕込まれた候文でしか書けない昔気質（かたぎ）の人。
ロ　高尚な内容は高雅な文体をもってつづるべしと説き、後輩に範を示そうとする理想主義者。
ハ　閑暇をもて余し、手紙の文体に凝って精練し、後世に残すことに生きがいを見いだそうとする趣味人。
ニ　空疎な内容をふくらまし、飾り立てることによって、自分の所論に権威をもたせようとする形式主義者。
ホ　古風な文体を利用して内容を高尚ならしめ、説得の効果をあげて自分に従わせようとする策略家。

問七　「私」が友人から本を借りた理由として、最も適当なものを、次のイ～ホのうちから選べ。

イ　黄村先生の茶道の知識がにわか仕込みであることを看破しつつ、それに対抗する用意をするため。
ロ　茶席の経験がないと見抜いて嘲笑されるのが恐ろしく、急ごしらえで茶の湯の心得を仕入れるため。
ハ　芸術家志望者として、風流の心得がなくては失格であるという黄村先生の教訓に心服したため。
ニ　自分にも優雅な友人がいて、そういう自分が決して野暮な人間ではないことを証明してみせるため。
ホ　黄村先生が茶会に招待する意図がくみ取れず、その意図を探ることがまず必要であったため。

2 **次の文章を読んで、後の問いに答えよ。**（関東学院大・文）

昨日まで私はマメカスやハコベを食べて操車場ではたらき、西日本の全地方からやってくる貨車を毎日、毎日、突き放したり、連結したりしながら、いざとなれば地雷を抱いて戦車の下腹へかけこむ覚悟でいた。死は冒険小説や漫画のように輝かしく、また易しく思われた。連日、大空襲があって、市には難民が氾濫し、南方諸島や北方諸島の拠点はつぎつぎと全滅し、飛行場には飛行機が一台もなくて滑走路に芋畑をつくり、その芋からアルコールをとって飛行機をとばすのだと将校たちは中学生に真摯、激烈な演説をした。私は仲間といっしょに腹をかかえて笑いころげたが、その愚劣と一日も早く玉砕したいという憧れとは矛盾しなかった。[A]愚劣を知れば知るだけそれは昂進していくようですらあった。[B]私たちの場合は空から焼夷弾や爆弾が降ってくるばかりで〝敵〟を肉眼で見たことがない。《鬼畜米英》の1活字は新聞でのたうちまわっているが私たちのうち誰一人として鬼畜を見たものがなく、その眼や頬について語れるものがなかった。[C]私たちはもし命令があれば歯でも磨くように爆死する決心でいた。[D]帽子から兎をとりだすように政治は〝敵〟をとりだせるのだった。

一度だけ、私は殺されかかったことがあった。操車場には毎日のように艦載機が襲来し、翼が貨車の屋根にすれすれになるくらいの低空飛行で機銃掃射をやった。或る日の午後、私は逃げおくれて友人といっしょに田ンぼへころげこんだ。その瞬間、《熊ン蜂》がかすめた。大きな物量が非常な速度で後頭部にのしかかってくるのが感じられ、私は手足がしびれてしまった。友人と格闘しつつ泥へ沈んだ瞬間、私は積乱雲のわきたつ夏空を2傾いたまますべっていくジュラルミンの輝きと、3巨大な昆虫の眼のような風防グラスと、[E]、信じられないほどの薔薇色に輝く〝敵〟を見た。眼はその頬が笑っていると見た。私にむかって彼は笑いかけていると私は思った。人は笑いながら人を殺せるのだ。そして私は友人を蹴りたおし、しがみつく手をはらいのけ、一歩でもさきへでようとしたのだ。私は人を殺しかかっていたのではあるまいか。手のなかで細い肩が4くにゃくにゃし、友人は私に沈められつつ、おかあちゃん、おかあちゃんと声をたてた。

「かんにんや、かんにんや」

そう聞いたようにも思うのだ。友人は泥のなかに沈んだが5声は異様な掌となって私の頬をうった。みんなから脳が温いといって日頃、バカにされ、そうされることに満足している、薄弱な彼なのに、その瞬間はまるで巨人のようであった。私は稲のなかに倒れ、口いっぱいに甘い泥がつまった。

（開高健「輝ける闇」）

解答・解説⇩別冊40ページ

問一　空欄A～Eに当てはまる適切な語を、次の語群から一つずつ選び、記号で答えよ。

イ　だから　　ロ　もしも　　ハ　すなわち　　ニ　あるいは　　ホ　そしてはじめて
ヘ　まるで　　ト　しかも　　チ　それでいて　　リ　むしろ　　ヌ　そして最後に

問二　傍線部**1**～**5**は、次のいかなる比喩（ゆ）の表現法に該当するか。イ～チのうちから一つずつ選び、記号で答えよ。

イ　対句法　　ロ　擬人法　　ハ　擬態語　　ニ　直喩
ホ　隠喩　　ヘ　提喩　　ト　換喩　　チ　諷（ふう）喩

問三　波線部の四字漢字は、上下の関係が〈修飾・被修飾〉の組み合わせから成っている。次のAの(1)～(5)の四字漢字は、Bのどの組み合わせに該当するか。イ～チのうちから一つずつ選び、記号で答えよ。

A

(1)　興味津々　　(2)　周章狼狽
(3)　半醒半睡　　(4)　暗中模索
(5)　和魂洋才

B

イ　修飾・被修飾　　ロ　主語・述語
ハ　目的語・述語　　ニ　手段を示す語・述語
ホ　状況を示す語・述語　　ヘ　反対語
ト　対等語　　チ　類義語

問四　〈私〉にとって、死とはどういうものであったのか。全文を読んで、次のイ～チのうち、最も適当と思われるものを一つ選び、記号で答えよ。

イ　国のために、いさぎよく迎え入れたいと憧れるもの。
ロ　冒険小説や漫画のように輝かしく容易なもの。
ハ　歯を磨くのと同じような日常的なもの。
ニ　不意に襲われると、自分の本性を暴露するもの。
ホ　いざとなれば自分から選ばなくてはならないもの。
ヘ　友人を突き飛ばしてでも、どうしても避けたいと願うもの。
ト　初めて目にする敵によって与えられたかもしれないもの。
チ　人を恐怖のどん底に突き落とすもの。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（明治学院大・文・社会。改作）

邸内に棲まわせてある長尾の一家にも、折り折り多少の風波が起こる。そうすると必ず五百が調停に往かなくてはならなかった。その争いは五百が商業を再興させようとして勧めるのに、安が躊躇して決せないために起こるのである。宗右衛門の長女敬はもう二十一歳になっていて、1生得やや勝ち気なので、母をして五百の言にしたがわしめようとする。母はこれを拒みはせぬが、さればとて実行の方へは、一歩も踏み出そうとはしない。ここに争いは生ずるのであった。

さてこれが鎮撫に当たるものが五百でなくてはならぬのは、長尾の家でまだ宗右衛門が生きていたときからの習慣である。五百の言には宗右衛門が服していたので、その妻や子もこれに抗することをばあえてせぬのである。

宗右衛門が妻の妹の五百を、ただ抽斎の配偶として尊敬するのみでなく、かくまでに信任したには、別に来歴がある。それはあるとき宗右衛門が家庭の＊ティランとして大いに安を虐待して、五百のきびしい忠告を受け、涙を流して罪を謝したことがあって、それからのちは五百の前に項を屈したのである。

宗右衛門は性質亮直に過ぐるとも言うべき人であったが、癇癪持ちであった。今から十二年前のことである。宗右衛門はまだ七歳の銓に読書を授け、この子が大きくなったら士の女房にすると言っていた。銓は2記性があって、書をよく読んだ。こういうときに、宗右衛門が酒気を帯びていると、銓をそばに引きつけておいて、忍耐を教えると言って、戯れのように煙管で頭を打つことがある。銓は初め忍んで黙っているが、のちには「お父っさん、いやだ」と言って、手を挙げて打つ真似をする。宗右衛門は怒って、「親に手向かいをするか」と言いつつ、銓を拳で乱打する。ある日こういう場合に、女房が停めようとすると、宗右衛門はこれをも髪をつかんで拉き倒して乱打し、「出て往け」と叫んだ。

安はもと宗右衛門の恋女房である。天保五年三月に、当時阿部家に仕えていた、まだ二十歳の安が宿に［3］、境町の中村座へ芝居を看に往った。このとき宗右衛門は安を見初めて、芝居がはねてから追尾して行って、紺野町の日野屋へ入るのを見きわめた。同窓の山内栄次郎の家である。さては栄次郎の妹であったかというので、ただちに人をやって縁談を申し込んだのである。

こうしたわけでもらわれた安も、拳のもとに崩れた丸髷を整える遑もなく、山内へ逃げ帰る。栄次郎は会津屋へ調停に往くことを面倒がる。妻はおいらん浜照がなれの果てで何の用にも立たない。そこでたまたま渋江の家から来合わせていた五百に、「どうかしてやってくれ」と言う。五百は姉を宥めすかして、4横山町へ連れて往った。

解答・解説⇩別冊41ページ

会津屋に往ってみれば、敬はうろうろ立ち廻っている。銓はまだ泣いている。妻の出たあとで、さらに酒を呼んだ宗右衛門は、気味の悪い笑顔をして五百を迎える。五百はしずかに詫言を言う。主人はなかなか聴かない。しばらく語を交えている間に、主人は次第に饒舌になって、光燄万丈当たるべからざるに至った。宗右衛門は好んで故事を引く。5偽書孔叢子の孔子三世妻を出だしたという説が出る。祭仲の女雍姫が出る。斉藤太郎左衛門の女が出る。五百はこれを聞きつつ思案した。これは負けていては際限がない。例しを引いて論ずることなら、こっちにも言い分がないことはない。そこで五百も論陣を張って、旗鼓相当たった。6公父文伯の母季敬姜を引く。顔之推の母を引く。ついに大雅思斉の章の「寡妻を正し、兄弟に至り、もって家邦を御す」を引いて、宗右衛門が雝々の和を破るのを責め、7声色ともに厲しかった。宗右衛門は屈服して、「なぜあなたは男に生まれなかったのです」と言った。

長尾の家に8争いが起こるごとに、五百が来なくてはならぬということになるには、こういう来歴があったのである。

＊ティラン＝〔フランス語〕暴君。

（森鷗外「渋江抽斎」）

問一　傍線部1の「生得やや勝ち気なので」とはどういうことか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

イ　少々得を考えがちな性格なので　　ロ　やや勝負事に向いているところがあるので

ハ　生まれつき少々気のつよい性格なので　　ニ　生まれつきやや商業に向いているので

問二　傍線部2の「記性があって」とはどういうことか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

イ　記憶力がよくて　　ロ　しっかりした性格で

ハ　ものごとを記録することが好きで　　ニ　なにごとにも気のつくたちで

問三　空欄3を埋めるのに最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

イ　下がって　　ロ　上がって　　ハ　泊まって　　ニ　入って

問四　傍線部4の「横山町」には何があるのか。次から選び、記号で答えよ。

イ　山内栄次郎の家　　ロ　渋江の家　　ハ　会津屋　　ニ　日野屋

問五　傍線部5・6のさまざまな故事はどのような主張を正当化するために引かれているか。それぞれ十五字以内で平易に述べよ。

問六 傍線部7の「声色ともに厲(はげ)しかった」とはどういう意味か。十五字以内で平易に述べよ。

問七 傍線部8の「争い」とはどんな争いか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

イ 宗右衛門と銓の争い　　ロ 宗右衛門と安の争い

ハ 宗右衛門と敬の争い　　ニ 安と敬の争い

標準問題

4

次の文章は川端康成『化粧』の一節である。読んで、後の問いに答えよ。（京都産業大・法）

解答・解説⇩別冊42ページ

私の家の窓は谷中の斎場の厠と向かい合っている。

二つの厠の空地は斎場の芥捨場である。葬式の供花や花環が捨てられる。

（中略）仕事をする時はたびたび厠へ立つ私は、その夜幾度となく菊の匂いを嗅いで、徹夜の疲れがその薫りのなかに消えてゆくように感じた。やがて朝の光に、白菊はいよいよ白く、銀紙は輝きはじめた。（ａ）用を足しながら私は、白菊の花に一羽のカナリヤがつととまっているのを見つけたのであった。昨日の放鳥が疲れて鳥屋への帰りを忘れたのであろう。

これなぞはまあ美しいとも言えようが、しかしまた私は、それらの葬いの花々が腐ってゆく日々も、厠の窓から見なければならない。ちょうどこの文章を書いている三月初めは、一つの花環に咲いた紅薔薇と桔梗とが、萎れるにつれてどんな風に色変わりしてゆくかを五六日の間つぶさに見たのであった。

それも植物の花ならばいい。斎場の厠の窓に、私はまた人間も見なければならないのである。若い女が多い。なぜなら、男は入ることが少なく、老婆は斎場の厠のなかまで長いこと突立って鏡を見るほどに、もう女ではないのだろう。しかし、若い女のたいていは、そこに立ち止まってから、化粧をする。葬式場の厠で化粧をする喪服の女――濃い口紅を引くところを見たりすると、屍を舐める血の唇を見たように、私はぎょっとして身を縮める。彼女等は皆落ちつきはらっている。誰にも見られていないと信じながら、（ｂ）隠れて悪いことをしているという罪の思いを体に現している。

私はそういう奇怪な化粧を見たいとは思わない。しかし二つの窓は年中向かい合っているのだから、このいまわしい偶然の一致も決して少なくはない。私はあわてて眼をそらす。こうして私が、街頭や客間の女達の化粧からも、葬式場の厠のなかの女を思い浮かべるようになれば、1それは確かなしあわせにちがいない。谷中の斎場へ葬いに来ることがあっても、厠へはいらないようにと、私は好きな女達へ手紙を出しておこうかと思ったりした。彼女等に［A］等の仲間入りをさせないようにである。

（ｃ）昨日である。

斎場の厠の窓に、白いハンケチでしきりに涙を拭いている十七八の少女を、私は見た。拭いても拭いても涙があふれてくるらしい。肩をふるわせてしゃくりあげている。とうとう悲しみに押し倒されたのか、彼女は立ったまま厠の壁にどんと身を倒

した。もう頬を拭く力もなく涙を流れるにまかせていた。

彼女だけは隠れて化粧に来たのではあるまい。隠れて泣きに来たのにちがいない。

その窓が私に植えつけた2女への悪意が、彼女によってきれいに拭い取られてゆくのを感じていると、その時、全く思いがけなく、彼女は小さい鏡を持ち出し、鏡に[B]と一つ笑うと、ひらりと厠を出て行ってしまった。

私には謎の笑いである。

問一 空欄a～cに入る最も適当な言葉を、次の中から一つずつ選び、記号で答えよ。

イ しかし　ロ しかも　ハ そして

ニ ついに　ホ ところが　ヘ ところで

問二 空欄Aに入る最も適当な言葉を、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ 魔女　ロ 悪女　ハ 醜女

ニ 烈女　ホ 美女

問三 空欄Bに入る最も適当な言葉を、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ いひひ　ロ うふふ　ハ えへへ

ニ おほほ　ホ にいっ

問四 本文中に次の文が抜けている。それはどこか。その箇所の直前の文の末尾十字を記せ。

私は水を浴びたような驚きで、危うく叫び出すところだった。

問五 傍線部1「それは確かなしあわせにちがいない」とあるが、それはなぜか。最も適当な理由を次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ 人生の無常を感じるから

ロ 人間観察眼が深まるから

ハ 女性の本質を把握できるから

ニ 女色に心乱されることが少なくなるから

ホ　妻を大切にするようになるから

問六　傍線部2「女への悪意」とあるが、具体的にはどのような気持ちをいうのか。本文に即して四十字以内で述べよ。

次の文章は井上靖の小説『孔子』の一部である。読んで、後の問いに答えよ。（千葉大）

子貢の館に入ると、1誰も彼もが子貢と抱き合ったり、子貢の傍らでお互いが抱き合ったりして、涙ながらの最後の別れを惜しみました。私もまたそのようにしましたが、その時、そこから窓越しに望める子の墓所の傍らには、すでに子貢のための新しいa庵が造られてありました。子貢は四十六歳、更にこれに続く三年を子にお仕えしようというのであります。

私はそうした子貢らしい亡き師への仕え方に、強く心をひかれるものはありましたが、私などのまねるべきことではありませんでした。更にこれからなお墓側にはべる者があるとすれば、子路、顔回亡きあと、それは子貢であり、しかも子貢一人であるべきであろうかと思われました。

子路、顔回の名を挙げましたが、――兄弟子たちの名が現実も消えることなく、2あなたさま方のお耳に入っているということは、何とも言えずうれしいことでございます。子路は六十三歳で、顔回にいたっては四十一歳の若さで、共に師に[A]立っております。

私でございますか、私は顔回より五歳年下でありますが、いつか顔回より三十年、子路より八年という歳月を長く生きてしまい、今や七十三歳で亡くなられた師・孔子の没年にさえ近付こうとしております。[B]齢を重ねるというのはこのことで、まことにお恥ずかしい次第でございます。が、これも天のb然らしむるところ、与えられた生を私は私なりに、思いc邪なく生きて行こうと思っております。

ご覧の通り、今は[C]者まがいの日々、わずかな田畑を耕し、なるべく世の汚れに染まらぬようにと、ただそれだけを心掛けて、その日その日を自分本位に送っております。しかし、お心のひろい子はおd咎めにはならぬでありましょう。お前はそれでいい、そういう子のお声が聞こえて参ります。大体、子も本当は現在の私が送り迎えしているような毎日をお持ちになりたかった、お持ちになりたくてたまらなかった！　私には、私だけには、そうした子のお心の内がよくわかっております。

しかし、子はそうなさらなかった。なさることはできなかった。いつもこの紊れに紊れた世が少しでもよくなるようにと、一人でも不幸な人がなくなるようにと、日夜、そのことに頭をお悩ましになり、その考えを人にお説きになっていらしった。〝この紊れに紊れた世から眼をほかにe逸らせてはいけない。どんなことがあっても、人間が生きひしめいているこの現世から足を外してはいけない。そうではないか、この人という名で呼ばれているf輩と共に生きるのでなくて、他の何ものと共に生きようというのであるか。（　　）、鳥獣の群れに入ることはできないのだ〟。――どこか一点、3さびしそうなところのある子のお声が聞こえて参ります。自分自身におっしゃっている子

解答・解説⇩別冊43ページ

のお声であります。

でも、子はご自分に［D］しているものを、弟子の仲間にも入れぬような私などにはお求めにならず、ひどく寛大なところがおありでした。山に入りたければ山に入りなさい。それがいい。そして自分を汚さないで生きなさい。それがいい。この山に入ってから、何度、寛大な優しい子のお声を耳にしたことでありましょう。

問一 傍線部a～fの漢字の訓読みを、平仮名で記せ。

問二 空欄A～Dの中に入れるのに最も適当と思う漢字をそれぞれ一字ずつ記せ。

問三 （　）の中には、次のどれを入れたらよいか、記号で答えよ。

イ あながち　ロ しょせん　ハ さながら　ニ ともあれ　ホ ちなみに

問四 傍線部**1**と**2**は、それぞれどういう人たちか。本文から推定して、十五字以内（句読点を含む）で記せ。

問五 傍線部**3**にいう孔子の声のさびしさは、なにからうまれるのであろうか。本文の趣旨にそって八十字（句読点を含む）で記せ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（明治学院大・文・法）

王はやおら車から降りて蘇武のまえに立った。ここにまた過ぎ去った十幾年が1別の立派な姿をして現れた。しかしどこかに影を失った2ような……。やや蒼ざめた羊飼いの大きく見はった目とさっと赤くなった王の細く若若しい目とが出あった。そしてその刹那王の目がたじろぐように羊飼いの長く垂れた鬚のあたりへとそれた。そのあいだに囚われ人が王にすべきように、羊飼いが貴人にすべきように、蘇武は礼をつくして李陵を小屋へ招じ入れた。扈従の軽騎たちは下馬するやいなやすぐに適当な場所をみつけていくつかの毛織の天幕を張ることを急いだ。二人はうす暗い小屋のなかで人目のないのを見るやいきなりひしと抱きあって泣いた。昔の感情が湧いてやまないのであった。彼らが人目をしのんでそうしているのを誰も外で気のつく者はなかった。とはいえそのときまでも自分たちの命を気づかいぶるぶるもので部屋の隅にちぢこまってた3雁たちが奇異の思いをしながらこの光景を眺めた。そして4語りもあきず聴きもあきぬ浮寝の床のひとつ話にした。

そのとき扈従の一人が天幕の用意ができたと知らせてきた。そして蘇武のために新しい衣装が届けられた。李陵が外で待ってるあいだに蘇武は襤褸を新衣ときかえ、5漢節だけはいつものとおり身をはなさずに持って出た。彼が小屋の戸をしめかけたときに忘れられた雁たちは思わず声を出して蘇武の注意をうながした。今おいてゆかれて扈従の連中にでも見つかったら6たまるものではない。蘇武は気がついた。で、彼らを呼び出して李陵にひきあわせ、手短に一部始終を話してきかせた。李陵は古い友の救い主を嬉しく思っていった。

「そうか。でかしおったな。それではお供をしてこい。褒美をとらせるぞ」

「クワーッ」

彼らが天幕のほうへ歩き出したときに先に立った王の宝剣よりも羊飼いの朽ちた杖のほうが光ってみえた。そうして匈奴の扈従よりも雁の供まわりのほうがりりしくみえたというのが羽根のある種族の古い主張なのである。

王の大天幕には暖かい火と、明るい燭と、甘い酒と、いろいろな珍味とがあった。そして命に応じて胡人たちが聴きなれぬ楽を奏し、歌いかつ踊った。蘇武は柔らかい茵に坐って絶えて久しい酒に酔った。雁たちは滋味のある穀物で腹をふくらせた。

ややあって李陵は皆をしりぞけ、蘇武にむかい言葉をあらためていった。

「単于は私が足下ともと親交のあったことをきいて足下を説得させるためにはるばるここへ来させたのだ。足下がこうしていくら待っていたところで到底漢へ帰ることはできない。かような人も住まぬ処で徒に苦しんでおっても信義のあらわれる気

解答・解説⇩別冊44ページ

づかいはない。足下の兄弟二人は7事に坐して自殺してしもうた。太夫人もとうになくなられ、夫人も再嫁されたとのことじゃ。そのほかの人たちも十幾年もたった今となっては生死のほどもわかりはせん。人生朝露のごとしというではないか。私も降服した当座は8漢に負いたことに胸を痛めて狂気のような有様じゃった。私も足下もそこにはかわりはないのである。かつ9陛下が10春秋高く、法令常なく、大臣の罪なくして滅される者数十家、安き心もない有様だという。足下はそんなところへ帰ってどうしようというのか」

蘇武が答えた。

「私ども父子はさしたる手柄も徳もなくて陛下のおとりたてにあずかり高位高官を賜わってお側近く召し使われた。身を殺して御奉公をすることはもとより本望である。臣の君に事えるのは子が父に事えるごときものである。子は父のために死んでも恨むところはない。私一身のために御心配くださる御芳志はまことに辱いがどうぞもうそのことは二度というてくださるな」

李陵はそのうえいうべき言葉もなくて口をとじた。

おりおり夜風が吹きはためかす天幕のなかに二人はさし向かいでしきりに葡萄の酒の盃をとりかわした、11夷狄の王服をまとった心の追放者と、心はいっかなくずおれぬ形骸の追放者と。酔いのまわるにしたがってはじめになにがなし苦しく辛く隔てられた二人はゆらめく燭火とともにうごく二つの12が似かようようにだんだん昔の友人になってきた。蘇武はいつもの蘇武とはうってかわって元気よく顔をほてらしながら、しかし声を落としてきいた。

「足下の武勇をもちながら敗戦して捕らえられるなぞとは私にはどうしても信じられなかった。天運か。地の利か。戦いの模様を委しく話してほしい」

李陵の顔にはありありと苦悩の色がみえた。しかしこれは昔の友人に対してこよない弁明の機会であった。で、彼は感慨深くその当時を思い出しながらややかん高い声で歯切れよく語り出した。

（中勘助「雁の話」）

問一　本文は主要な登場者三者からなっている。その名を次の文の空欄A～Bにそれぞれ三字以内で本文中より選んで、それを記せ。

右は北海のほとりの[A]の小舎を[B]が訪れた折りのことを、二人の旧友の再会の場に終始立ち合ってその模様を見聞していた[C]が、――厳密にはその数千年後にその子孫が、ということなのだが――語り手となって物語るという形で書かれた小説の一節である。

問二 傍線部1「別の立派な姿」とは、

(a) 誰の姿か。

(b) それは誰とくらべられた上での「別の」姿か。

それぞれ本文中の人名で答えよ。

問三 傍線部2「ような」とあって、そのあとが省略されているが、何が省略されているのか。一字の語を本文中から選んで記せ。

問四 傍線部3「雁たち」を比喩的に指すもう一つの表現を、本文中より七字以内で書き抜け。

問五 傍線部4を、五字以内で言い換えよ。

問六 傍線部5「漢節」が本文後段で別の呼び方をされている。その語を本文中から七字以内で書き抜け。

問七 傍線部6「たまるものではない」は、具体的にどのようなことが起こりかねないから「たまるものではない」のか。十字以内で記せ。

問八 傍線部7「事」とは何を指すか、最も適切なものを次から選び、記号で答えよ。

イ 他の事件

ロ 疑獄

ハ 李陵の敗戦

ニ 蘇武の敗戦

ホ 二人の敗戦

問九 傍線部8「漢」と傍線部9「陛下」はそれぞれ、本文において別の語と対置されている。そのそれぞれ二字以内の語を本文中より抜き出せ。

問十 傍線部10「春秋高く」とはどういう意味か。最も適切なものを次から選び、記号で答えよ。

イ 情緒不安定

ロ 老齢

ハ 好色

ニ　高慢
ホ　狡猾（こうかつ）

問十一　傍線部11について説明する次の文中の二つの空欄Dに入る同一の二字の語を、本文中から選んで入れよ。

一人が「心の追放者」と呼ばれるのは彼が［D］して以来の心の持ち方を表し、もう一人が「形骸の追放者」であるのは彼が［D］しなかったことから来る辛苦の年月に原因する。

問十二　空欄12に適当な語を入れよ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（東北学院大・文）

私は一度河鹿をよく見てやろうと思っていた。

河鹿を見ようと思えばまず大胆に河鹿の鳴いている瀬のきわまで進んでゆくことが必要である。これはそろそろ近寄って行っても河鹿の隠れてしまうのは同じだからなるべく神速に行うのがいいのである。瀬のきわまで行ってしまえば今度は身をひそめてじっとしてしまう。「俺は石だぞ。俺は石だぞ」と念じているような気持ちで少しも動かないのである。ただ眼だけはらんらんとさせている。ぼんやりしていれば河鹿は渓の石と見わけにくい色をしているから何も1見えないことになってしまうのである。やっとしばらくすると水の中やら石の蔭から河鹿がそろそろと首をもたげはじめる。気をつけて見ていると実にいろんなところから——それが皆申し合わせたように同じくらいずつ——恐る恐る顔を出すのである。すでに私は石である。彼らは等しく恐怖をやりすごした体で元の所へあがって来る。今度は私の一望の下に余儀ないところで中断されていた彼らの求愛がencoreされるのである。

こんなふうにして間近に河鹿をながめていると、ときどき不思議な気持ちになることがある。［A］は人間が河童の世界へ行く小説を書いたが、河鹿の世界というものは案外手近にあるものだ。私は一度私の眼の下にいた一匹の河鹿から忽然としてそんな世界へはいってしまった。その河鹿は瀬の石と石との間にできた小さい流れの前へ立って、あの奇怪な顔つきでじっと水の流れるのを見ていたのであるが、その姿が南画の河童とも漁師ともつかぬ2点景人物そっくりになってきた、と思う間に彼の前の小さな流れがサーッと広々とした3江に変じてしまった。その瞬間私もまたその4天地の孤客たることを感じたのである。

これはただこれだけの話にすぎない。だが、こんな時こう私は最も［B］な状態で河鹿をながめていたと言い得るのかもしれない。それより前私は一度こんな経験をしていた。

私は渓へ行って鳴く河鹿を一匹つかまえて来た。桶へ入れて観察しようと思ったのである。桶は浴場の桶だった。渓の石を入れて水をたたえ、ガラスで蓋をして座敷のなかへ持ってはいった。ところが河鹿はどうしても自然な状態になろうとしない。蠅を入れても蠅は水の上へ落ちてしまったなり河鹿とは別の生活をしている。私は退屈して湯に出かけた。そして忘れた時分になって座敷へ帰って来ると、チャブンという音が桶のなかでした。なるほどと思って早速桶の傍へ行って見ると、やはり先ほどのとおり隠れてしまったきりで出て来ない。今度は散歩に出かける。帰って来ると、またチャブンという音がする。あとはやはり同じことである。その晩は、傍へ置いたまま、私は私で読書をはじめた。忘れてしまって身体を動かすとまた跳び込

解答・解説⇩別冊46ページ

んだ。最も自然な状態で本を読んでいるところを見られてしまったのである。翌日、結局彼は「あわてて跳び込む」ということを私に教えただけで、身体へ部屋中のほこりをつけて、私が明けてやった障子から渓の水音のする方へ跳んで行ってしまった。――これ以後私は二度と5この方法を繰り返さなかった。彼らを自然にながめるにはやはり渓へ行かなくてはならなかったのである。

（梶井基次郎「交尾」）

問一　空欄Aに入る人名を次から選び、記号で答えよ。

イ　梶井基次郎　　ロ　芥川龍之介

ハ　夏目漱石　　ニ　井伏鱒二　　ホ　山本有三

問二　傍線部1について、(1)「何」が(2)「何」を見ようとしても「見えないことになってしまう」のか。

問三　傍線部2「点景人物」の意味として次のうちどれが最も適当か。記号で答えよ。

イ　点描画のような人物像

ロ　風景画の中に添えられた人物

ハ　それぞれの景色をつなぐ人物

ニ　画の中心点を占める人物

ホ　背景と溶けあって定かでない人物

問四　傍線部3「江」とは何か。次の中から選び、記号で答えよ。

イ　入り江　　ロ　大河　　ハ　海

ニ　渓　　ホ　湖

問五　傍線部4「天地の孤客たることを感じた」とはどのような心情であるのか。次のうちから選び、記号で答えよ。

イ　この世界でひとり孤高の境地にいるような超然とした気持ち。

ロ　自分は居場所のない招かれざる客に過ぎないという孤独感。

ハ　この世界に何一つ頼るものを持たない孤児のような頼りなさ。

ニ　しょせん河鹿とは別々の天地に存在するしかないという寂しさ。

ホ　自分の生命を、悠々の天地をひとり旅する者と捉えた感慨。

問六　空欄Bに入るべき語を書け。

問七　傍線部5で、(1)「この方法」とはどんな方法か十字以内で、また、(2)「この方法」をやめて「私」がとったのはどういう方法か二十字以内で、それぞれ本文中の表現を用いて答えよ。

発展問題

8

次の文章は森鷗外作『阿部一族』の一節で、細川忠利の近習役内藤長十郎が、主君の死に殉じて切腹する直前の様子を描いた場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。（広島大・前期）

解答・解説⇩別冊47ページ

四月十七日の朝、長十郎は衣服を改めて母の前に出て、始めて殉死の事を明かして暇乞をした。母は少しも驚かなかった。それは互いに口に出しては言わぬが、きょうは倅が切腹する日だと、母もとうから思っていたからである。a もし切腹しないとでも言ったら、母はさぞ驚いたことであろう。

母はまだもらったばかりのよめが勝手にいたのをその席へ呼んでただしたくができたかと問うた。よめはすぐに立って、勝手からかねて用意してあった＊杯盤を自身に運んで出た。よめも母と同じように、夫がきょう切腹するということはとうから知っていた。b 髪をきれいになでつけて、よい分のふだん着に着換えている。母もよめも改まった、まじめな顔をしているのは同じ事であるが、ただよめの目の縁が赤くなっているので、勝手にいた時泣いたことがわかる。杯盤が出ると、長十郎は弟左平次を呼んだ。

四人は黙って杯を取りかわした。杯が一順した時母が言った。

「c 長十郎や。お前の好きな酒じゃ。少し過ごしてはどうじゃな。」

「ほんにそうでござりまするな」と言って、長十郎は微笑を含んで、ここちよげに杯を重ねた。

しばらくして長十郎が母に言った。「よい心持ちに酔いました。先日からかれこれと心づかいをいたしましたせいか、いつもより酒がきいたようでござります。御免をこうむってちょっと一休みいたしましょう。」

こう言って長十郎は立って居間にはいったが、すぐに部屋のまん中にころがって、いびきをかきだした。女房があとからそっとはいって枕を出して当てさせた時、長十郎は「ううん」とうなって寝返りをしただけで、またいびきをかき続けている。女房はじっと夫の顔を見ていたが、たちまちあわてたように立って部屋へ行った。d 泣いてはならぬと思ったのである。

家はひっそりとしている。ちょうど主人の決心を母と妻とが言わずに知っていたように、家来も女中も知っていたので、勝手からも厩のほうからも笑い声なぞは聞こえない。

母は母の部屋に、よめはよめの部屋に、弟は弟の部屋に、じっと物を思っている。主人は居間でいびきをかいて寝ている。あけ放ってある居間の窓には、下に風鈴をつけたつり葱がつってある。その風鈴がおりおり思い出したようにかすかに鳴る。その下には丈の高い石の頂を掘りくぼめた手水鉢がある。その上に伏せてある捲物の柄杓に、やんまが一匹止まって、羽を山

形にたれて動かずにいる。

一時たつ。二時たつ。もう午を過ぎた。食事のしたくは女中に言いつけてあるが、姑が食べると言われるか、どうだかわからぬと思って、よめは聞きにゆこうと思いながらためらっていた。もし自分だけが食事の事なぞを思うように取られはすまいかとためらっていたのである。

その時かねて介錯を頼まれていた関小平次が来た。姑はよめを呼んだ。よめが黙って手をついてきげんを伺っていると、姑が言った。

「長十郎はちょっと一休みすると言うたが、いかい時がたつような。ちょうど関殿も来られた。もう起こしてやってはどうじゃろうの。」

「ほんにそうでござります。あまりおそくなりませんほうが。」よめはこう言って、すぐに立って夫を起こしに行った。

夫の居間に来た女房は、先に枕をさせた時と同じように、またじっと夫の顔を見ていた。死なせに起こすのだと思うので、しばらくはことばをかけかねていたのである。

熟睡していても、庭からさす昼の明かりがまばゆかったと見えて、夫は窓のほうを背にして、顔をこっちへ向けている。

「もし、あなた」と女房は呼んだ。

長十郎は目をさまさない。

女房がすり寄って、そびえている肩に手を掛けると、長十郎は「あ、ああ」と言って臂を伸ばして、両眼を開いて、むっくり起きた。

「たいそうよくお休みになりました。お袋様があまりおそくなりはせぬかとおっしゃりますから、お起こし申しました。それに関様がおいでになりました。」

「そうか。それでは午になったと見える。少しの間だと思ったが、酔ったのと疲れがあったのとで、時のたつのを知らずにいた。そのかわりひどく気分がようなった。茶づけでも食べて、そろそろ東光院へゆかずばなるまい。おかあ様にも申し上げてくれ。」

武士はいざという時には飽食はしない。しかしまた空腹で大切な事に取り掛かることもない。長十郎は実際ちょっと寝ようと思ったのだが、覚えず気持ちよく寝過ごし、午になったと聞いたので、食事をしようと言ったのである。これから形ばかりではあるが、一家四人のものがふだんのように膳に向かって、午の食事をした。

長十郎は心静かにしたくをして、関を連れて菩提所東光院へ腹を切りに行った。

＊杯盤＝杯と皿鉢。宴席の道具。

問一 傍線部aに「もし切腹しないとでも言ったら、母はさぞ驚いたことであろう」とある。なぜ母は驚くのであろうか。その

理由を三十字以内にまとめて述べよ。

問二 傍線部bに「髪をきれいになでつけて、よい分のふだん着に着換えている」とある。どのような気持ちからそうしているのであろうか。五十字以内で説明せよ。

問三 傍線部cに「長十郎や。お前の好きな酒じゃ。少し過ごしてはどうじゃな」とある。これについて、

(1) このことばは、母のどのような気持ちを表しているか、説明せよ。

(2) 文章中に見られる母の態度を考え合わせ、この言いまわしの表現上の特色について簡潔に説明せよ。

問四 傍線部dに「泣いてはならぬと思ったのである」とある。これについて、

(1) これと同じ文末の形式を持つ文がこれ以外に三つある。それらを本文中から抜き出して書け。

(2) これらの四つの文は文章上共通した役割を果たしている。それはどのような役割であるか。簡潔に答えよ。

問五 家人と長十郎の様子が最も対比的に描き出されているのはどこか。該当する二文をそれぞれ末尾の十字で示せ。

問六 本文中には特色ある情景描写が見られる。これについて、

(1) この場面にいちじるしい効果を与えている情景描写を二つ抜き出して書け。

(2) それらの情景描写は、家人と長十郎の様子が対比的に描き出されている部分と呼応して、この場面の雰囲気をさらに高めている。その雰囲気の特色を二十字以内で書け。

問七 本文中の長十郎、母、よめの三人について、

(1) 三人のうち、長十郎と母は、同じような振舞いをしている。どのような点が同じようだと言えるのか。三十字以内で書け。

(2) 三人のうち、よめの振舞いには、他の二人とは違うところがある。どのような点で、他の二人と違っているのか。根拠を示して説明せよ。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（京都大・前期）

蝙蝠傘を杖に日和下駄を曳き摺りながら市中を歩む時、私はいつも携帯に便なる＊嘉永板の江戸切図を懐中にする。これは何も今時出版する石版摺の東京地図を嫌って殊更昔の木版絵図を慕ふといふわけではない。日和下駄曳き摺りながら歩いて行く現代の街路をば、歩きながらに昔の地図に引き合はせて行けば、おのづから労せずして江戸の昔と東京の今とを目のあたり比較対照する事ができるからである。

例へば牛込弁天町辺は道路取りひろげの為め近頃全く面目を異にしたが、其の裏通なる小流に今猶其の名を残す根来橋といふ名前なぞから、之を江戸切図に引き合はせて、私は歩きながら此辺に根来組同心の屋敷のあった事を知る時なぞ、歴史上の大発見でもしたやうに訳もなく無暗と嬉しくなるのである。かやうな1馬鹿々々しい無益な興味の外に、又一ツ昔の地図の便利な事は雪月花の名所や神社仏閣の位置をば殊更目につき易いやうに色摺りにしてあるのみならず時としては案内記のやうにこの処より何々まで凡幾町植木屋多しなぞと説明が加へてある事である。凡そ東京の地図にして精密正確なるは陸地測量部の地図に優るものはなからう。然し是を眺めても何等の興味も起こらず、風景の如何をも更に想像する事が出来ない。土地の高低を示す蚰蜒の足のやうな符号と、何万分の一とか何とか言う尺度一点張りの正確と精密とは却ってa当意即妙の自由を失ひ見る人をして唯煩雑の思ひをなさしめるばかりである。見よ不正確なる江戸絵図は上野の如く桜咲く処には自由に桜の花を描き柳原の如く柳ある処には柳の糸を添へ得るのみならず、又飛鳥山より遠く日光筑波の山々を見ることを得れば直ちにこれを雲の彼方に描き示すが如く、臨機応変に全く2相反せる製図の方式態度を併用して興味津々よく平易にその要領を会得せしめている。この点よりして不正確なる江戸絵図は正確なる東京の新地図よりも遥かに直感的また印象的の方法に出でたものと見ねばならぬ。現代西洋風の制度は政治法律教育の万般のこと尽く此に等しい。現代の裁判制度は東京地図の煩雑なるが如く大岡越前守の眼力は江戸絵図の如し。更に語を換ゆれば東京地図は幾何学の如く江戸絵図は模様のやうである。

江戸絵図はかくて日和下駄蝙蝠傘と共に私の散歩には是非ともなくてはならぬ伴侶となった。江戸絵図によって見知らぬ裏町を歩み行けば身は自ら其の時代にあるが如き心持ちとなる。実際現在の東京中には何処に行くとも心より恍惚として去るに忍びざる程美麗な若しくは荘厳な風景建築に出遇はぬかぎり、bいろいろと無理な方法を取り此によって纔かに幾分の興味を作り出さねばならぬ。然らざれば如何に無聊なる閑人の身にも現今の東京は全く散歩に堪へざる都会ではないか。西洋文学から得た輸入思想を便りにして、例へば銀座の角の＊ライオンを

解答・解説⇩別冊49ページ

以て直ちに巴里のカツフエーに擬し帝国劇場を以て＊オペラになぞらへるなぞ、無暗矢鱈に東京中を西洋風に空想するのも或る人には或いは3有益にして興味ある方法かも知れぬ。然し現代日本の西洋式偽文明が森永の西洋菓子の如く女優のダンスの如く無味拙劣なるものと感じられる輩に対しては、東京なる都会の興味は、勢尚古退歩的たらざるを得ない。吾々は市ケ谷外壕の埋立工事を見て、いかにするとも将来の新美観を予測することの出来ない限り、愛惜の情は自ら人をしてこの堀に＊藕花の馥郁とした昔を思はしめる。

＊嘉永＝一八四八～一八五四年。　ライオン＝珈琲店の名称。「カツフエライオン」。　オペラ＝パリの歌劇場「オペラ座」のこと。　藕花＝はす。はちす。

（永井荷風「日和下駄」〈大正四年〉）

問一　傍線部1～3は、それぞれどういうことを言おうとしているのか、簡潔に答えよ。

問二　傍線部a～bは、具体的にはどのようなことを意味しているのか、答えよ。

問三　筆者は、江戸絵図（切図）のどのような点をよしとしているのか、文中に窺える近代風の東京の風景への批判をふまえて、二百字以内で述べよ。